図版解説

泉涌寺蔵韋駄天画像

関口正之

十三世紀初期に俊芿（一一六六―一二二七）が京都に開いた泉涌寺には、弟子の湛海が宋から請来した仏舎利を安置する舎利殿が建てられている。舎利殿内の舎利厨子の傍には韋駄天としては著名な、湛海請来と伝える彫像が安置されるが、当寺には俊芿の請来との寺伝がある韋駄天画像（図版Ⅰ～Ⅲ）も所蔵される。水墨画の韋駄天像は数点知られているが、本図のような絹本著色の本格的な本尊画は他に例がなく貴重な作品であるので、ここに紹介する。

現存する韋駄天像は、例外なく合掌する両腕の上に宝剣を横たえて立つ像として造像される。本図も同じである。しかし、形像を説く経軌は見当らない。

韋駄天を描く例としては、伝牧谿筆韋駄天・猿図[1]（福岡美術館蔵、三幅対）、伝明兆筆雲中韋駄天図[2]（名古屋・総見寺蔵）、狩野探幽筆韋駄天・昇降竜図[3]（島根・柳田家蔵、三幅対）の写真図版が公表されているが、いずれも水墨画であり、甲冑の表現は明瞭ではない。甲冑を着けた神将形は、高麗で造られた版経、写経の巻頭や巻末に描かれ[4]、日本の南北朝時代頃の舎利厨子扉に描かれた例[5]もある。彫像は、泉涌寺舎利殿像も禅宗寺院の厨房近くに安置される像も神将形であり護法神としての性格が明らかである。韋駄天像の表現は、画像も彫像も含めても宋代以降の例しか残されていないようである。

泉涌寺蔵

挿図1　韋駄天像

泉涌寺の韋駄天画像は、絹本著色、縦四八・四cm、横二九・八cmの絹継ぎのない小さな画面に描かれる。画中にも表裃にも銘記等はない。肉身を肌色に表わし淡い墨の輪郭線に沿って暈どりを施こす。鼻の下方は肌色が欠けるが、その表面に描かれた髭の墨線は眉や眼の表現と同質の濃墨線を重ねるもので当初のものと考えられる。肩、胸、腰には鎧の一部が見え、武装の上から着た外衣の表現は重々しい。着衣は表を濃緑色の地色を基調とし、裏地を白色か白に近い色にした重厚な配色にする。その中に鎧の胸当の赤色系の縹繝彩色、袖口を一巡する帯状の淡桃色、鎧の下の腰衣の赤色とが小さく彩色され、濃緑色に映じて効果的である。さらに、着衣の各部全面に施こされた細かい金泥の文様がこれらの配色の効果を一層華やかなものにする。鎧の上を肩にかける天衣状の着衣には羽を広げる鳳凰と雲、鎧の胸前を巻く帯状の衣に牡丹唐草、外套袖口の淡桃色地の表面に丸花文、袖と裾の端には雲文と連珠文がそれぞれ配置される。これら金色の輝きに対し着衣の裏地の白色をはじめ、鎧の上の白い帯、鎧胸部の先端や脛当先端の縁飾りに彩色された白色が呼応して着衣の濃彩に活気を与える。また、脛当と靴の褐色部分は金泥の暈を加え、地味な彩色となる足先を装飾性豊かな上方の表現に充分対応させている。頭光は円輪状に白く描き、輪郭を切金と思われる線で表わす。白の円輪に焔をからませ、焔には金泥の暈を施こす。韋駄天背後の空間には淡い白色の雲が描かれ、韋駄天が立つ岩座は墨で簡略に描かれる。

本図は俊芿が宋から請来したものと伝えるが、確かに鎌倉時代仏画の中に本図を置いて新しいと感じる表現は見られる。眉・髭の描線をはじめ面貌表現の密度が高いこと、着衣の金泥文様が尊像の大きさに対して細密であること、頭光の火焔や靴の縁に金泥の暈を施こすことなどの点である。その一方で宋代仏画とは考えられぬ表現もある。すなわち、着衣の翻がえり方が装飾文様の細密さに呼応しきれず重苦

しいこと、山口県竜蔵寺の鎗金四天王扉[6]にみる宋代の天部像と比べると靴の表現が簡略であること、金泥の雲文が形態を正確に表現し切れなかったと思われること、さらに雲中の韋駄天像に対して岩座をも描き加えたことなどである。これらの点は手本を模倣するときに現われ易い特色であり、本図が或いは宋代仏画を手本として描いたことを示唆するものといえよう。細頸な描線と細密な文様を駆使する傾向の作品としては、十四世紀頃の作と考えられる東京国立博物館蔵玄奘三蔵像、建武二年（一三三四）銘の大阪・長宝寺蔵仏涅槃図（ともに重要文化財）があり、玄奘像は細かい文様を全面に配する装飾法と描線の点に、長宝寺仏涅槃図は会衆の着衣に金泥の文様を刻明に描く本図の装飾法と類似した姿勢がうかがえる。これらの点は、本図の表現が鎌倉時代から南北朝時代にかけての仏画表現に通じるものであることを示しており、制作年代は十四世紀頃と考えられる。

韋駄天の彫像は禅宗寺院において厨房や食堂など食事と関わりのある場所に安置され、その像の前で韋駄天諷経が行なわれるなど本尊としても尊宗される像であった。これに対し泉涌寺舎利殿の彫像は舎利厨子のすぐ脇に仏舎利を守るように安置される。この像は、俊芿の弟子聞陽湛海が建長七年（一二五五）に仏舎利や楊貴妃観音とともに宋から請来したものと伝えるように本像は当初から仏舎利を守るに適わしい尊像という認識が泉涌寺では存在していたと推測できる。釈迦の涅槃の折に仏舎利の一部を盗んで逃げる捷疾鬼を韋駄天が追い仏舎利を取戻したという説話が「太平記」巻第八、谷堂炎上事に述べられている。この後、日本では走る速さを譬えて「韋駄天走り」の言葉が生れたほど親しまれる尊像となったが、この説話は漢訳仏典や中国の文献には未だ見出されていない。南北朝時代頃の舎利殿の扉絵の一枚に韋駄天が大きく描かれることは、この頃には仏舎利を守護する韋駄天という考え方が成立していたと考えられる。さらに溯って、湛海が仏舎利を宋から請来した時期に仏舎利と韋駄天とを結びつけて考えていたと推測することができよう。

泉涌寺の仏舎利は、唐時代に南山律宗を確立した道宣（五九六―六六七）が感得したものと伝え、俊芿がそれを請来することを望んだが果せず、俊芿歿後に弟子湛海が請来できた由緒あるものと言われる。道宣ゆかりの仏舎利を請来できなかった俊芿は道宣律師画像（重要文化財）を描かせて持ち帰った。道宣は感神の徳を持つ人と言われ、仏舎利を天人から授けられたこと、道宣の前に韋将軍が姿を現わしたことなどの説話が多い。宋代になると『無準師範禅師語録』巻六に「韋駄尊天[7]」、『偃溪広聞禅師語録』巻下に「韋駄天変相[8]」の語が見られるように禅僧の間に韋駄天の存在が注目されたことが窺がえる。このことについて、後世の日本では元禄二年（一六八九）刊の運敞撰『寂照堂谷響集』第十集に、韋駄天は唐の道宣の説話に登場する「韋（天）将軍」のことを一般には言っていると記し[9]、寛保元年（一七四一）刊の無著道忠編『禅林象器箋』は、道宣が感見した将軍を「為二韋駄天一訛矣」と記すが、韋将軍と韋駄天とを取り違えたとの説の当否は別にして、俊芿や湛海が入宋した頃には、神将形をした韋駄天像と仏舎利の組合わせが道宣の存在を介して生じていたと推測できる。韋駄天の名が宋代禅僧の語録に現われ、元代以降の経巻に韋駄天の姿が描かれることは、韋駄天を韋将軍に似た神将形の姿に表現することと、韋駄天を特に守護神として注目することとが宋代頃から始まることを示唆すると言えよう。

註

（1）東京大学東洋文化研究所『中国絵画総合目録3』347頁。
（2）東京大学東洋文化研究所『中国絵画総合目録4』128頁。
（3）「国華」154号（明治三十六年三月）。
（4）山本泰一「見返し絵のある中国の紺紙金字法華経―徳川美術館蔵―」（「金鯱叢書」8、昭和五十六年）図8。
京都・宝積寺蔵紺紙銀字妙法蓮華経（菊竹淳一・吉田宏志『高麗仏画』、一九八一年、朝日新聞社、図66）他。
（5）静岡・個人蔵黒漆塗六角舎利殿（奈良国立博物館『仏舎利の荘厳』、昭和五十八年、図88）。
（6）台信祐爾「竜蔵寺蔵鎗金四天王図扉絵」（「美術史」113、昭和五十七年十一月）。
（7）卍続蔵経、巻121、962頁上。
（8）卍続蔵経、巻121、303頁上。
（9）大日本仏教全書、巻149、184―185頁。
（10）明治四十二年、貝葉書院、134頁。